

自伝的記憶の想起における視点の違いが 自己変化の評価に及ぼす影響

○北神 慎司

(名古屋大学大学院環境学研究科)

Key words : autobiographical memory, memory perspective, assessments of personal change

自伝的記憶とは、個人が人生の中で体験したさまざまな出来事に関する記憶の総体であるとされる。高橋 (2000) によれば、この自伝的記憶は、想起する際、再構成的性格を持つと考えられている。その証拠として、たとえば、Nigro & Neisser (1983) では、自伝的記憶を想起するときに、現在の自分が、第三者の立場から過去の自分を含むシーンを眺める視点 (3人称の視点) と、その出来事を経験したときと同じ視点 (1人称の視点) とがあることが示されている。

また、自伝的記憶は、その名前からも容易に推測できるように、自己と密接な関連性を持っていると考えられる (高橋, 2000)。たとえば、Libby, Eibach, & Gilovich (2005) は、想起した過去の自分と現在の自分との違いに注目し、1人称の視点と3人称の視点とに分けて自伝的記憶を想起させたところ、3人称の視点のほうが1人称の視点よりも、自己の変化をより大きく感じさせることを示した。

そこで、本研究では、自伝的記憶の想起において、視点の違いが、自己の変化に対する評価にどのような影響を及ぼすかについて、想起の反復という要因も含めて検討する。このように、想起の反復を追加要因として検討する理由は、自伝的記憶の再構成的性格についてさらなる確証を得るためである。つまり、想起が反復されることによって、自伝的記憶の再構成的性格が強まり、その結果、自己の変化もより強く感じられることが予想される。具体的には、実験 1a で、想起の反復が行われない場合を、実験 1b では、想起の反復が行われた場合に、1人称あるいは3人称という想起の視点、自己評価にどのような影響を及ぼすかを検討する。

【方法】

実験参加者とデザイン : 実験 1a, 1b ともに、それぞれ、参加者は、大学生 24 名。デザインは、想起の視点 (1人称・3人称) を要因とする参加者間 1 要因計画。

材料 : 両実験で共通に用いられた質問紙は、「高校卒業時期の出来事」を回答するページ、「高校卒業時と現在とで変化した部分」を回答するページ、「想起の視点を操作」するための指示文が示され、視点を維持するための数項目の質問に回答するページ、「自己変化の評価」やイメージの鮮明度・確信度などを回答するページから構成された。自己変化の評価に関する項目は2つあり、1つは、「想起した出来事が起こってからどのくらい変化したかを「0:全く変わっていない」から「10:完全に変わった」までの10段階で答えるものであり、もう1つは、「想起した出来事が起こった時 (過去) と現在の自分とにどのくらい重複部分があるか」について、重なりを7段階に変化させたベン図から選択するものであった。

手続き : 両実験で共通の手続きは以下の通りであった。実験は質問紙を用いて、1~3名の小集団形式で行われた。まず、実験参加者に高校卒業時のことを思い出してもらい、その記憶のキーワード、その出来事が起こった年月を記述するよう求めた。次に、高校卒業時と現在の違いに注目させ、変化した部分を7分間記述させた。その後、視点の操作として、た

とえば、3人称条件では、「第三者の視点からその出来事を思い出してください。言い換えると、記憶の中で、あなたは周りにあるものと同様に、あなた自身が見えます。」という指示がなされ、それに続く視点を維持するための質問 (例 3人称条件 : あなたが身に付けているものが見えるか、など) について回答を求めた。最後に、自己変化の評価、および、補足的な質問項目として、イメージの鮮明度・確信度などの回答を求めた。なお、想起の反復が行われる実験 1b では、「高校卒業時の出来事」の想起の間隔、回数は、Hyman & Pentland (1996) にならい、1日おきに3回とし、自己変化に関する評価は3回目の想起の最後のみ行った。

【結果と考察】

表 1 実験 1a における各質問項目の平均値 (想起反復なし)

	1人称条件	3人称条件
自己変化		
10段階評定	6.33 (2.06)	7.25 (1.54)
ベン図 (7段階)	3.67 (1.23)	3.17 (1.59)
想起イメージ		
鮮明度 (7段階)	5.25 (1.14)	5.67 (1.15)
確信度 (7段階)	5.92 (0.67)	6.33 (0.78)

表 2 実験 1b における各質問項目の平均値 (想起反復あり)

	1人称条件	3人称条件
自己変化		
10段階評定	6.50 (1.45)	7.50 (0.52)
ベン図 (7段階)	3.42 (1.00)	4.00 (1.35)
想起イメージ		
鮮明度 (7段階)	4.75 (1.14)	5.67 (0.89)
確信度 (7段階)	5.75 (0.97)	5.92 (0.90)

表 1, 2 に示した各項目について、条件間の差異を検討するためにそれぞれ *t* 検定を行った結果、想起の反復が行われた実験 1b において、10段階評定で行われた「想起した出来事が起こってからどのくらい変化したか」という項目 ($t(13.822)=2.25, p<.05$)、および、「出来事の様子をどのくらい鮮明に思い浮かべることができたか」という想起イメージの鮮明度に関する項目 ($t(22)=2.20, p<.05$) において、有意な差がみられた。つまり、3人称の視点から自伝的記憶を反復して想起した方が、1人称の視点よりも、より大きな自己変化を感じ、想起されたイメージもより鮮明であることが示された。

想起の反復がない状況で、Libby et al. (2005) の結果を追認することができなかったため、解釈は限定的にならざるを得ないものの、先行研究の結果と本研究の結果を併せて、総合的に解釈すれば、想起の反復によって、自伝的記憶の再構成的性格が強まり、その影響は自己評価に及ぶということが示唆されたと考えられる。

(KITAGAMI Shinji)